

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520016

研究課題名(和文) 近代哲学史のなかのカント理論哲学 対話的哲学史の試み

研究課題名(英文) Kant's Theoretical Philosophy in the Contexts of Modern Philosophy: A Proposal for Dialogic History of Philosophy

研究代表者

城戸 淳(KIDO, Atsushi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：90323948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は『純粹理性批判』を中心とするカントの理論哲学を近代哲学史のコンテキストに位置づけ、デカルト、ロック、ライプニッツ、ヒュームなどの近代の哲学者との対比を補助線にしてカント哲学を解釈することを課題とした。これはまた、近代の哲学者たちとカントとの哲学的対話の地平を設定して、カント哲学を近代哲学史の大きな問題連関のなかで再考する試みでもあった。その主要な成果は『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』(単著、知泉書館、2014年)として刊行された。

研究成果の概要(英文)：I studied Kant's theoretical philosophy (especially of the Critique of Pure Reason) in the contexts of modern philosophy by comparing him with such modern philosophers as Descartes, Locke, Leibniz, and Hume. This comparison aimed at opening philosophical dialogues between Kant and those philosophers and thereby interpreting Kant's philosophical insights against the background of the "dialogic" history of modern philosophy. As a fruit of this study I published the monograph: The Abyss of Reason: A Study of Kant's Transcendental Dialectic (Tokyo: Chisen Shokan, 2014, pp. xviii+292+44).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：カント 哲学史 デカルト ロック ライプニッツ ヒューム 『純粹理性批判』

1. 研究開始当初の背景

近年の文献学的・哲学史的なカント研究は、カント哲学の直接的な背景である 18 世紀ドイツ哲学へと遡源することが多い。しかしこのような微視的な手法によっては、かえって巨視的な哲学史の見通しが失われ、カント哲学が西洋哲学史のなかで占める意味と、その哲学的な射程が見失われかねない。そのため、あらためてカント哲学の本質的な洞察をひろく近代哲学史のコンテクストのなかで再考する必要があるとの反省にいたった。

2. 研究の目的

本研究は、以上の背景をふまえて、『純粹理性批判』を中心とするカントの理論哲学を、その中核的な諸問題に即して近代哲学史のコンテクストのなかで位置づけるべく、デカルト、ロック、ライプニッツ、ヒュームなどの近代の哲学者との対比を補助線にしてカント哲学の輪郭を切り出すことを主たる研究課題とした。

これはまた、近代の哲学者たちとカントとの哲学的対話の地平を設定することによって、カントの批判哲学の本質的な洞察をこの「対話的哲学史」なかで再考する試みでもあった。

さらには、このような対話をつうじて、現代の哲学的状況にカント的な観点からコミットすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は方法論的には、近代の諸哲学の伝承とカントへの受容を跡づけ、カント哲学における批判的対決を再構成し、哲学的対話地平の設定を目指すものである。以下は各年度について簡潔に記す。

22 年度は、デカルトの「観念」モデルの確立とその帰趨を考察し、さらにカントの超越論的観念論との異同を問うた。

23 年度はカントに観念モデルを中継したロックの哲学をとりあげ、その経験論的な観念説がもつ射程とカント哲学との対比を主題にした。

24 年度では、ライプニッツとカントの多面的な影響・対決関係を体系的に整理し、「知性的世界体系」の哲学とカントの批判哲学との原理的な異同を明らかにすることを目指した。

25 年度は、ヒュームによる因果関係への問いとそれに対するカントの応答に関して一定の見通しを付けるとともに、本研究全体を総括する研究を進めた。

4. 研究成果

四年間の研究をつうじて、近代哲学史のなかでカントの理論哲学を位置づける作業を続けてきた結果、新たな手法にもとづくカント解釈として一定の成果を得たと思われる。

この解釈の方法は、一方では英米系の分析哲学を背景とした分析的なカント研究が陥る不毛さと、他方では 18 世紀ドイツ哲学の諸相へと迷い込んでしまう歴史的なカント研究の狭隘さというジレンマを乗り越えて、本質的な哲学的問題を大きな哲学史的コンテクストに展開して再考するものであり、それによってカント研究を問題思索的な哲学史研究へと転回することを図るものであるといえよう。

以下では、下記の「主な発表論文等」からいくつかを拾いあげて、本研究課題の多面的な成果の概要を紹介する。

図書 6 の「想像力と共通感覚 カント哲学のコンテクスト」では、「想像力」や「共通感覚」といった哲学的な基礎概念とその歴史に即して、カント哲学のコンテクストを再構成することを試みた。

図書 5 の『純粹理性批判』の解説文は、デカルトのコギトやライプニッツの「意識知覚 (apperception)」の問題構成のコンテクストをふまえて、カントの理論哲学の中核へと導入する試みである。

学会発表 2 の「カントの Cogito ergo sum 解釈」では、デカルト以降の「私はある」の諸論証と対比して、カントの自我存在論の特異性を際立たせることを目指した。

雑誌論文 5 「学問と理性 啓蒙主義からカントへ」では、カントの「理性 (Vernunft)」概念の成立を、科学革命、17 世紀の合理論、18 世紀の啓蒙哲学などの、近代の大きな思想動向のなかで考察した。

雑誌論文 3 「人間的自由の宇宙論的本質について カントの第三アンチノミーにおける自由の問題」では、ロックやライプニッツなどの両立論的な自由論に対峙して、宇宙論的な次元に人間的自由を定礎するカント哲学の試みを、その思想史的な背景に配慮して描きだした。

雑誌論文 2 「カントと人格同一性の問題 第三誤謬推理のコンテクスト」では、デカルト、ロック、ライプニッツなどの「人格 (person)」の伝統に遡って、カントの第三誤謬推理の問題機制を哲学史的に再構成することができた。

図書 3 の「現象の形式へ カントの感性論の第 2 論証を読む」は、カントの超越論的感性論のもつ哲学的方法論としての射程を、ニュートンやライプニッツといった近代の空間・時間論のコンテクストのなかで解明したものである。

図書 2 の「カントと心身問題」は、カント

の心身問題へのアプローチの特異性を、デカルト以降の心身問題論の構図との対比によって明らかにした。

雑誌論文1と4の「ピストリウス「シュルツェ著『カント『純粹理性批判』解説』書評」は、カントの近代哲学史的な位置づけを、とくにカント哲学に対する同時代の批評に即して確かめようと試みたものであり、これは今後の研究課題にも繋がる。

最後に図書1『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』は、カント『純粹理性批判』の超越論的弁証論にかかわる筆者のこれまでの研究の主要な成果をまとめたものであり、本科研費の成果もまた集約的に盛り込まれている。以下に目次を紹介する。

序論

- 第1章 「取り違い」概念の展開 発展史の一断面
- 第2章 超越論的弁証論と理性 沈黙の十年間
- 第3章 理性批判と自己意識 誤謬推理論の改稿をめぐって
- 第4章 人格と時間 第三誤謬推理のコンテクスト
- 第5章 カントの Cogito ergo sum 解釈
- 第6章 流れさった無限と世界の起源 第一アンチノミー
- 第7章 無限と崇高
- 第8章 人間的自由の宇宙論的本質について 第三アンチノミー
- 第9章 存在の深淵へ 神の現存在の宇宙論的証明

結語

本書の第3章以降は、超越論的弁証論における三つの特殊形而上学に対するカントの批判を解明することを主たる課題とする。序文で述べたように、

「そのさい、それらの理性批判の発端が、沈黙の十年間における努力や感性論や分析論でのカント固有の論点のみならず、さまざまな哲学史的な文脈のなかにも求められるということを示すことに心がけた。カントは哲学史にあらわれた諸潮流を弁証論的なさまざまな立場として取りこみ、その相剋を批判的に解決することで、超越論的弁証論をいわば 哲学史の法廷 として位置づけようとしていたと思われる。それゆえ逆に、弁証論の各論のテキストを哲学史的なコンテクストへと解きひらくことが、論点分析的解釈の課題のひとつなのである。しかもそのような哲学史は、カントが直接的に対峙していた十八世紀ドイツ哲学に限定されるものではない。むしろ、折衷的ともいえるドイツの啓蒙哲学に流れこんだ、古代から近世にいたるさまざまな潜在的なコンテクストこそが、出廷を求められている真の当事者なのである。それゆえ本書では、カントの哲学史の知識にこだわらずに、弁証論にこめられた思想史的なドラ

マを大きく再構成してみせることもあえて辞さなかった」(9~10頁)。

本書の刊行によって、カントの超越論的弁証論に即して「対話的哲学史の試み」の成果の一端を示すことができたのではないかと自認するところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{雑誌論文}(計7件)

- 1 城戸淳訳・解題「ピストリウス「シュルツェ著『カント『純粹理性批判』解説』書評」(下)」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科『世界の視点 知のトポス』第9号, 2014年3月, 1~32頁.(査読無)
- 2 城戸淳「カントと人格同一性の問題 第三誤謬推理のコンテクスト」, 東北大学哲学研究会編『思索』第45号, 2012年10月, 367~388頁.(退職記念号招待論文)
- 3 城戸淳「人間的自由の宇宙論的本質について カントの第三アンチノミーにおける自由の問題」, 新潟大学人文学部『人文科学研究』第130輯, 2012年3月, 1~32頁.(査読無)
- 4 城戸淳訳・解題「ピストリウス「シュルツェ著『カント『純粹理性批判』解説』書評」(上)」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科『世界の視点 知のトポス』第7号, 2012年3月, 1~28頁.(査読無)
- 5 城戸淳「学問と理性 啓蒙主義からカントへ」, 日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』第17号, 2011年12月, 91~101頁.(シンポジウム招待論文)
- 6 城戸淳訳・解題「イマヌエル・カント 観念論をめぐって 一七八〇年代の遺稿から(R 5642, 5653-5655)」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科『世界の視点 知のトポス』第6号, 2010年11月, 1~22頁.(査読無)
- 7 城戸淳「カントにおける幸福のパラドクス 幸福主義批判と最高善とのあいだ」, 日本カント協会編『日本カント研究 11 カントと幸福論』理想社, 2010年8月, 7~23頁.(シンポジウム招待論文)

{学会発表}(計4件)

- 1 城戸淳「人格と時間 第三誤謬推理のコンテクスト」, カント研究会第269回例

会(京都例会),2013年3月30日,キャンパスプラザ京都.

- 2 城戸淳「カントの Cogito ergo sum 解釈」,日本カント協会(カント・ワークショップ),2011年11月11日,首都大学東京(南大沢).
- 3 城戸淳「第三アンチノミーにおける自由の問題」,カント研究会第254回例会,2011年9月25日,上智大学.
- 4 城戸淳「学問と理性 啓蒙主義からカントへ,そしてヘーゲル」,日本ヘーゲル学会第12回研究大会シンポジウム,2010年12月25日,新潟大学.

〔図書〕(計6件)

- 1 城戸淳『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』,単著,知泉書館,2014年3月,xviii+292+44頁.
- 2 栗原隆編『感性学 触れ合う心・感じる身体』,東北大学出版会,2014年3月,城戸淳「カントと心身問題」(151~169頁).
- 3 栗原隆編『感情と表象の生まれるところ』,ナカニシヤ出版,2013年3月,城戸淳「現象の形式へ カントの感性論の第二論証を読む」(91~107頁).
- 4 愛媛大学法文学部/新潟大学人文学部編『人文学の現在』,創風社出版,2012年3月,城戸淳「回帰する問い 哲学の使命とその現在」(10~29頁).
- 5 熊野純彦編『近代哲学の名著 デカルトからマルクスまでの24冊』,中央公論新社,2011年5月,城戸淳「カント『純粹理性批判』I」(58~67頁).
- 6 栗原隆編『共感と感応 人間学の新たな地平』,東北大学出版会,2011年4月,城戸淳「想像力と共通感覚 カント哲学のコンテクスト」(59~75頁).

6. 研究組織

(1)研究代表者

城戸淳 (KIDO, Atsushi)

新潟大学・人文社会・教育科学系(人文学部)・准教授

研究者番号:90323948